

2. 問題点

情報教育アドバイザーが活動する中で、次のような問題点が挙げられます。

1. コンピュータ環境について
2. 学校全体について
3. 小学校と中学校の違い
4. 打ち合わせの重要性
5. 情報教育アドバイザーの問題点

1. コンピュータ環境について

学校現場ではさまざまなコンピュータトラブルが発生します。情報教育アドバイザーが改善できる点も多いですが、機器のメンテナンスについては、修理をする事ができないあるいはネットワークやサーバーについての質問が多く、業者に依頼をしなければ改善できないことがあります。以下にはコンピュータ環境の問題点を明記します。

- (1) ノートパソコンが新たに導入されているが、管理体制・使い方が学校によって違う。
- (2) 壊れたまま放置され、不安定な状態のパソコンがある。
- (3) プリンタの不具合またはフリーズした場合など、先生の方で対処できない場合が多い。
- (4) インターネットはできるが校内 LAN ができない状態になることがある。
- (5) 生徒機の設定がすぐ変更されてしまう。
- (6) ウィルス対策をしていない。
- (7) サーバーのファイル管理ができていない。
- (8) ビデオ編集を依頼される学校が多いが、ビデオ編集ができるパソコンがない。ビデオ編集をすると、動作が不安定になり、編集ができない。

以上の他にも様々なトラブルや問題がありますが、それらの処理を情報教育アドバイザーで対応するには無理があります。

2. 学校全体について

各市によっても情報教育推進についてのガイドラインは違いますが、市内の学校で格差が非常に広がっています。さらに、学校内でも学年によって、クラス単位でも格差が広がりつつあります。

一番の問題点は、学校長・教頭先生の情報教育についての意識が大きく関わっていると思われます。実際、学校長・教頭先生自身も研修会や打ち合わせに積極的に参加する学校は全体としてとても積極的に活動していると思われます。次の問題は情報担当の先生の問題です。たいていの学校は 1 名の情報担当の先生がいますが、パソコン機器の問題から授業活用について、さらに研修の実施など 1 名ではとても負担が大きく全学年の把握をするのはとても困難であること。そこで情報教育アドバイザーは次のようなアドバイスをしております。

- (1) 学校長・教頭先生も積極的に研修会に参加し、学校全体で取り組める姿勢をとる必要がある。
- (2) 情報担当の先生は機器の管理・研修・授業支援などの情報教育アドバイザー活用の把握をする。
- (3) 小学校では各学年あるいは低学年・高学年の担当者を決め、学年担当で年間計画を立てる。
その際の計画を立てる段階から情報教育アドバイザーと連携を図ることで、学校そして情報教育アドバイザーも流れが分かり、支援ができる体制が整う。
- (4) 中学校では、技術だけでなく、学年あるいは教科ごとに担当者を置き年間計画を立てる。
- (5) 学年・教科で連携を図れるようになると学年別の授業内容が決定し、計画を立てやすくなる。
- (6) 情報担当の先生は学年・教科でまとまった計画・内容を学校全体の動き、計画として把握していく。

いずれにおいても、計画の段階から情報教育アドバイザーと連携を図ることで、学校全体の流れが明確になりスキルアップの向上が期待できます。その反対に、学校で既に計画がある場合、その計画を情報教育アドバイザーに提示してもらうことで効率的に情報教育アドバイザーを活用することができます。そして、情報担当の先生 1 名だけに任せるのではなく学年・教科でそれぞれが担当することで、学校全体の中で一人一人の先生が取り組んでいくことができるようになります。

3. 小学校と中学校の違い

小学校の現状

- (1) 学年・クラス単位で授業の内容がばらばらで、先生が把握できていないことが多い。
- (2) 授業支援として情報教育アドバイザーを活用することが多いが、実際には授業を情報教育アドバイザーが行うことが多い。完全に授業を任せたいという意見も多数ある。
- (3) 普通教室での活用を推進しているが、小学校ではパソコン室での活用が多く、先生自身が授業にパソコン機器を使ってすることが少ない。

中学校の現状

- (1) 打ち合わせをとる時間がない。
- (2) 研修をするが当日になって、集まる事ができないことが多い。
- (3) 技術のみの活用が目立ち、他教科の活用が難しい。
- (4) 先生が情報機器を使った授業をしようと思った場合、先生も操作に十分慣れていないとできないという考えが強く、活用方法が解からないため、実現が難しい。

特に、中学校は打ち合わせをする時間がとれないため、情報教育アドバイザーは活用方法や、操作方法についてのアドバイスをすることができないため、結果先生の不慣れ、教科での活用ができないという悪循環がつづいている状態です。現在でも中学校での情報教育アドバイザーの活用は、教科での取り組みより、成績処理やホームページの更新支援などの、技術的な面での支援が多い状況です。これは平成 12 年度に報告されている状況とあまり変わっていません。

4. 打ち合わせの重要性

授業支援を行う場合、打ち合わせを行ってから授業をする場合と打ち合わせをしないで授業をする場合では、授業の流れ、子供の理解度に変化があります。打ち合わせをしないで行くと、一度限りの授業や研修になり、次の授業や研修につながらず、結果毎回同じような内容の授業になってしまい、前後の関係が繋がらないので子ども達の理解度にも大きく影響してきます。

●授業支援への対応

授業支援を行う際に、打ち合わせを行わないで授業に望んだ場合、情報教育アドバイザーが状況を把握することが難しく、次へのアドバイスができないことが多い。

●研修会への対応

希望内容が各校によって違うため、レベルを把握しにくく、研修を担当する講師は研修の準備をすることができない。研修をする際は事前に打ち合わせが必要。

5. 情報教育アドバイザーの問題点

情報教育アドバイザーには、コンピュータ及びソフトウェアについての幅広い知識が求められるだけでなく、教科での活用についてのアドバイスをするにあたり、さらに教科についての知識が必要となっており、しかし、これらの条件を満たす情報教育アドバイザーを育成するにはとても時間がかかります。学校現場で情報教育アドバイザーを派遣する上で以下のような問題点があります。

●打ち合わせへの対応

打ち合わせをする場合、情報教育アドバイザーは先生が望むことを如何に効率良く聞きだし的確なアドバイスができるか、また無理な要望や内容に問題がある場合、はっきりと先生にアドバイスが出来るかという点で、コミュニケーション力が必要です。しかし現実には殆どの場合、先生の希望の内容を聞くことはできるが、さらに踏み込んだアドバイスや、間違っている点や問題点には情報教育アドバイザーがなかなか学校の先生に対して意見が言えない状態です。

●アプリケーションやハードへの対応

学校によって利用しているアプリケーションが違う。ネットワークの設定がわからないため、先生に聞かれても、答えることができないことが多い。コンピュータトラブルへの対応ができない。